

かほだより

<肉用牛の飼養管理>

暑熱対策の基本は牛舎の温度を上げないことです・・・

牛さんにも夏バテ対策が必要です！



夏本番です。屋根の断熱、送風・通風の確保、新鮮な水の提供など牛舎設備の暑熱対策は実施していると思いますが、牛のからだ自体の対策も必要です。

✦ 第一胃の発酵を整えよう！

食欲低下、軟便、流涎（ヨダレを垂らすこと）している牛は要注意！

⇒異常発酵（亜急性ルーメンアシドーシス：SARA）の可能性
があります！

⇒SARAにより第一胃内に毒素（エンドトキシン）が産
生されると肝臓を傷害します。

対策

・第一胃機能の改善効果がある静
菌剤（トルミン、ミヤリサなど）や機
能性飼料（カニューッツ殻油など）を
給与しましょう。

・吸着剤（ゼオライト、ワトソカなど）
を給与しましょう。

※10日間程連続給与

✦ 特に肝臓のケアが重要です。

肝臓の機能が弱まると解毒の働
きが低下します。

混合ビタミン製剤（パンカルなど）の強肝剤を給与し
ましょう。※50~100gを5日間程度

✦ 飼料中の油脂が熱で酸化毒物(過酸化脂質)に変化しやすい！

過酸化脂質は体に入ると肝
臓、脾臓、小腸など様々な臓
器の機能を障害します。

過酸化脂質が多いと枝肉が
劣化しやすくなります。

・過酸化脂質を除去にはビタミン E（VE：抗酸化剤）の
添加が有効、肉質の向上にも効果的！

・VEは繁殖機能（特に性ホルモンの産生）にも効果あり。
（VEが不足すると発情微弱や流産や不妊の原因となります。）

※飼料中の油脂が傷まないよう飼料の注文をこまめに行うのも工夫の1
つ（夏場はバラでなく紙袋で注文することも良）

✦ ビタミンA(VA)欠乏に注意！！

夏場はVAの消耗が激しくなり血液中のV
A濃度が低くなりがち。

⇒VA欠乏は熱射病の引き金、肝障害の原因、
第一胃の発酵異常の原因などいろいろな傷
害を引き起こします！

⇒呼吸が速い、流涎、食欲が不安定、瞳孔が
散大などの症状を見たら即対応！

・ビタミンAの添加が必要です。

・体の中で働く酵素や生理活性物質の材料
となる亜鉛（有機亜鉛飼料）を一緒に給
与すると効果的！

※ビタミンAを添加はかかりつけの獣医師と相談の
上実施しましょう。

✦ 炎症や病気は早めに処置！

夏場の炎症（関節炎、肺炎、
ズルなど）は熱射病の引き金と
なります。

元気消失、食欲が不安定、脚の腫れ・むくみなど異常
がある場合は、体温を確認するとともに、かかりつけの
獣医師に診てもらいましょう。

暑熱対策の不備は、秋に病気や繁殖障害などを発生させます。油断大敵ですヨ！！

繁殖農家の皆さん、和子牛の“太り気味”に注意！

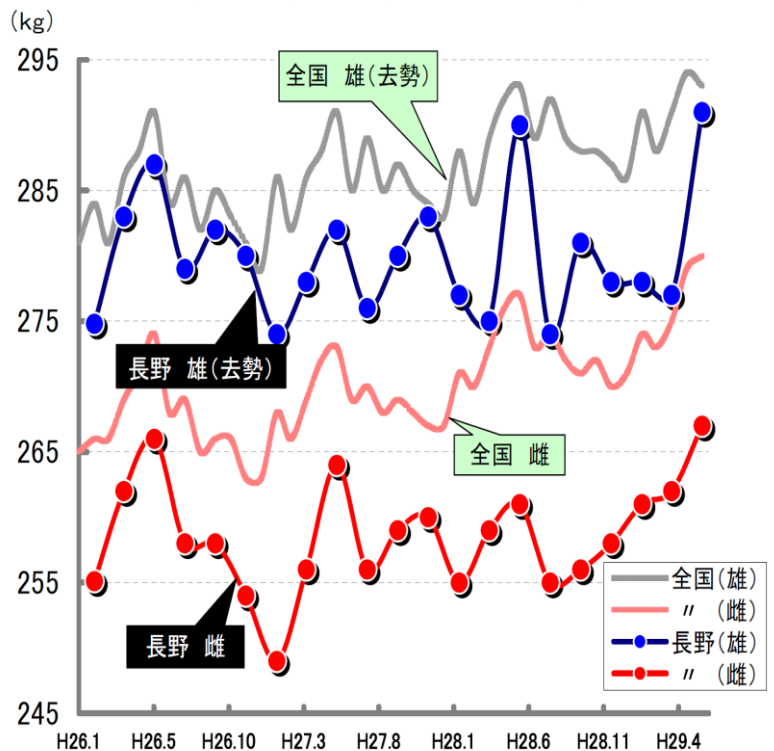
全国の和子牛の平均出荷体重をみると、5・6月は287kg(278日)*と平成26年度平均体重277kg(276日)に比べ10kg程度増加しています。平均体重は月によって変動しますが、平成27年以降はほぼ毎月、前年同月を上回っています。特に、去勢牛に比べて雌牛の体重増加幅が大きい傾向です(農畜産業振興機構データ:下図、*()内は平均出荷日齢)。

一方、長野県中央家畜市場では平均出荷日齢が全国に比べ2週間程短く、体重は全国平均よりも少ない傾向ですが、直近(6月)は去勢291kg(258日)、雌267kg(271日)と平成28年度平均[去勢:279kg(258日)、雌:258kg(269日)]を大きく上回っています。
 <数字のみを比較したため一概に“過肥傾向”と断定はできませんが・・・。>

太った子牛は、肥育期に飼料の栄養を減らして余計な脂肪を落とす“飼い直し”が必要となり、肥育期間が延び余計なコストと労力がかかります。また、期待通りの肉質にならない傾向もあります。

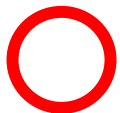
繁殖農家の皆さんは、「**太りすぎはマイナス効果**」という意識をもって適正な栄養管理に努めましょう。

月別の黒毛和種子牛取引の体重



商品性の高い子牛

Good!



商品性の高い枝肉



商品性の低い子牛



商品性の低い枝肉

